

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 371 回 「売らんがな観光」～日本観光は何を目指す？

2010.7.4

日本政府観光局（JNTO）はこのほど、5月の訪日外客数が、前年同月比 48.6%増の 72 万 2 千人だったとの推計値を発表した。昨年 5 月の新型インフルエンザなどに起因する落ち込みから回復。5 月として過去最高だった 08 年の 73 万 6 千人に次ぐ実績。1～5 月累計では前年同期比 32.0%増の 352 万 5 千人となった。特に中国は、86.4%増の 11 万 3 千人で、5 月としては初めて 10 万人台を記録した。

更に、7 月 1 日から、中国人向けの個人観光ビザの発給基準が緩和され、発給公館も全土に拡大された。ビザの取得対象世帯数は現在の約 10 倍、1600 万世帯に拡大する見通しで、これまで以上に中国からの観光客が増加しそうだ。また、人民元の弾力化で中国人客が買い物しやすい環境も金融面で整い、購買力はさらに高まると見られる。中国人客を迎える各機関、団体、業界の表情を追った。中国からの個人観光客向けビザの発給基準については、富裕層に加え企業や政府機関の中堅幹部クラスが該当する中間層にまで対象を拡大。世帯主が基準を満たせば、世帯主が来日しなくても 2 親等以内の家族にビザを発給することになった。

（出典：観光経済新聞・第 2568 号 2010 年 7 月 3 日発行 http://www.kankokeizai.com/backnumber/10/07_03/inbound.html#01）

もはやホテル・旅館やキャリア系業界、旅行業等「観光業界」に留まらず、日本経済の命運は中国の動向にかかっているかの如く、躍起になっている。国内市場の低迷をよそに百貨店・家電業界、金融業界等々、対中国人対策に燃えに燃えている。中国によって日本経済が潤うのだから、恐らく、いいことなのだろう。

明治以来、日本の政治も経済も、外国を真似、海外へ出て行くことにより自国の体制を築き上げてきた歴史がある。江戸時代の永い鎖国から明治、大正、昭和の経済成長を通して、ずっと海外市場を圧巻することにより、自国の富を蓄積する手法に、慣れきってしまったのが、今の日本人である。

しかしはるか昔の我々の先祖は、そうではなかった。遣隋使の推古朝、遣唐使の飛鳥・奈良時代はむしろ積極的に海外の優れた文化を迎え入れるため、人そのものを招聘し、帰化させ定着させていた。遣唐使は 200 年以上にわたり、当時の先進国であった唐の文化や制度、そして仏教の日本への伝播に大いに貢献した。

この「伝播」とは、帰化人を丁重に迎え入れるということに他ならない。今では考えられない「国際感覚」を有していたと思う。いつの間にか「島国」根性が身につき、攘夷思想が武士道の鏡になった。現在でも、日本人以外正式に住む事が出来ない、働くことが難しい労働市場は、未だに鎖国状態かもしれない。

太平洋戦争に敗れた後は極端な自虐観を植え付けられ、自国の文化や思想すら誇れず、日本人としてのアイデンティティを見失い、信念も、倫理観も、宗教も、哲学もかなぐり捨てた日本人。根底から拭いきれないコンプレックスがある限り、海外舞台で光り輝くシーンを垣間見ることは、皆無である。

外国人を異様な目で見ると日本人、積極的にコミュニケーションをとろうとしない日本人、外人がいたら、出来れば関わりたくないと避けてしまう、今の日本人。母国語以外話せない国民が大多数と言う国は、世界的に見れば、かなり稀有（けう）な状況で、「島国」体質から抜けきれない証拠かもしれない。

そんな国で 観光庁のビジット・ジャパン・キャンペーンとは、何か肝心なものが足りないような気がしている。中国にはありえない、優秀な商品・サービスを揃えて、何がなんでも売ってしまえ、中国人から一円でも儲けることが「インバウンド観光」だとすれば、大きな過ちであることに気が付いていない。

外国人と分かち合い、お互いの文化を尊重し学びあう心、コミュニケートを積極的に図り理解し合う喜び、迎え入れるフレンドリーな心や態度、それを相手に分かってもらえる努力がない限り、真の「観光」は成り立たない。ホスピタリティと安易に言いたくはないが、観光とは、そんなものだと思っている。

「売らんがな...」という腹が見えた途端、日本人とはやっぱり、そんな付き合いしか出来ないこと、一瞬のうちに見破られてしまうだろう。「観光」とは何ぞや！！じっくり考えるべきである。